



TITLE:

<Book Review>C. A. Fisher, A Social, Economic and Political Geography, South-east Asia, Methuen, London, 1964,xix+831p.

AUTHOR(S):

本岡, 武

CITATION:

本岡, 武. <Book Review>C. A. Fisher, A Social, Economic and Political Geography, South-east Asia, Methuen, London, 1964,xix+831p.. 東南アジア研究 1964, 1(4): 103-103

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54859>

RIGHT:

図 書 紹 介

C. A. Fisher: *A Social, Economic and Political Geography, South-east Asia*. Methuen, London, 1964. xix+831p.

シェフィールド大学フィッシャー教授がついに大著「東南アジアの社会・経済・政治地理」を刊行された。たまたま、クアラルンプールの書店で、かねがね出版の噂をきいていた本書の実物を手にして、とうとう出たかとの感を新たにしたのであった。

序文の冒頭にいわく、「ひとつの題目で40万語あまりを書きおえたとき、できればこれ以上書きたくないとの気持ちに抗しきれないだろう」と。まことに気負った書き出しだ。また第2次世界戦争直前からこの仕事をはじめ、3年半以上にわたる現地での抑留生活、そのあとひきつづき東南アジアの各地を調査したという20年以上にわたる長い経験。そしてそれをもとし、しかも40ページに近い付録の文献目録からも明らかなように、膨大な文献渉猟をともとしての業績。フィッシャー教授が当然にこの出版に気負っておられるし、またわたくしもこれを手にして感動せざるをえないのだ。

もちろん、わたくしは900ページに近い本書を読みおえていない。しかし、East および Spate 両教授編集の *The Changing Map of Asia* (1st ed. 1950, 4th ed. 1961) 所収のフィッシャー教授の長論文 "South-east Asia" (これは本書の第1部の骨子となっている) を東南アジア地理として最もすぐれた文献のひとつとして推すわたくしとしては、本書がおそらく東南アジア地理として最高水準にあるものとして推すことに躊躇しない。

本書はつぎのような構成をとる。第1部は統一体としての東南アジアであり、総論にあたる。東南アジアの性格、自然環境、住民等のあとをうけて、120ページにわたって歴史的過程が明らかにされている。第2部は赤道島嶼部であって、インドネシアにあてられ、インドネシアの自然条件、文化的歴史的基礎、第1次第2次世界戦争間の蘭領東インドの経済・社会地理、新インドネシアの経済的諸問題と政治的諸問題、西イ

リアンの諸問題が述べられている。第3部は熱帯大陸部であり、その自然的基礎、ビルマ、タイ、インドシナの章に分けられる。第4部は赤道大陸部であって、4章がマラヤと英領ボルネオにあてられる。第5部は熱帯島嶼部でフィリピン。第6部はエピローグとして、東南アジアと世界との関係が論ぜられる。

とにかく、大冊である。わたくしは、ただ1章だけあたえられているタイについての部分を丹念に読んだが、わたくしの知るかぎり、ひとつの誤謬も見出されなかった。もちん、地理学者が経済・政治・社会問題を論ずるときの弱さ——それは地理学者の宿命であろう——がなきにしもあらずだが、よくぞこれだけまとめあげたものだ、心から敬意を表せざるをえない。これがわたくしの一言にしてまとめうる感想だ。

(本岡 武)

Ronald McKie: *Malaysia in Focus*. Angus and Robertson, Sydney, 1963. xiii+236p.

去る1月27日づけの *Life International* 誌のアジア問題特集号は、パキスタンから日本に至るアジア諸国をカバーしている。その論旨は Time-Life minded と批難されるくらいはあるものの、きれいな写真で助けられて、アジア諸国の現実の問題点を、おもしろく解説している。

このアジア問題特集号のうち、マレーシアに関する解説は、ここに紹介する本書の抜萃でもってあてられている。

Life 誌が本書をそれほど高く評価していることから推察されるように、なかなか明快に、また興味深く、マレーシアの最近の姿をとらえている。著者のロナルド・マッキー氏は、オーストラリアのジャーナリスト。旅行記というよりも、訪問旅行のすぐれた印象記をおもしろく書くことで知られている。この本も、その意味では成功している。

とりわけ、オーストラリアが、東南アジアにたいして、いかに強い関心をもっているか、そのオーストラリアと東南アジアの結びつきが本書に強くあらわれて